日英語の語彙的結束構造：
テキストにおける情報の流れを考える

山本英一（近畿大学）

0　はじめに

文文法(sentence grammar)のレベルでは、言語が異なれば約束（＝文法）が細部に至るまで当然違ってくるというのが一般的認識である。しかし、文のレベルを越えて、テキストの領域に目をむけると、差異に着目したこの前提は怪しくなる。なぜなら、元のことば(A)を目標のことば(B)に翻訳し、これをそのままの形で提示したとしても、おおむね意味が通じてしまうために、テキストの段階ではA→Bへ翻訳する必要性が差し当たって感じられなくなるからである。差異をことさら強調する必然性が見当たらないのである。その上、文文法のように明示的な規則の体系として、いわばテキスト文法を構築することはさほど容易なことではなさそうである[1]。しかし、だからといって、テキストレベルでの翻訳は本当に不必要なのだろうか。

もし文を越えたレベルで配列の見直しや細かい調整は不要であると言うならば、その主張は両言語におけるテキストの構造、言い換えれば情報の流れそのものが同一であることを暗黙のうちに認めていることになる。本論では、英語と日本語のテキストにおける語彙的結束構造(lexical cohesion)のありかたを検討し、そういった主張の問題点を指摘するとともに、それぞれの言語に特有な情報の流れと、その背後で働いていると思われる原理について考えていくことにする。

1　語彙的結束構造

1．1

テキストがテキストとして認められるには、文と文の間に意味的関連性のあることが示されなければならない[1]。いわゆる意味的首尾一貫性(coherence)が要求される。この首尾一貫性は、いろいろな形で実現され得る[2]。語彙的結束構造は、そのひとつの様式であり、次のように先行する文脈にある語彙を受けて、意味的関連性を明示するものである。

(1)　I turned to the <u>ascent</u> of the peak.

a. *The ascent* was perfectly easy.　b. *The climb* was perfectly easy.

c. *The task* was perfectly easy.　d. *The thing* was perfectly easy.

e. *It* was perfectly easy.　(Halliday and Hasan 1976:278-279)

それぞれ「繰り返し」(＝1a)、「同義語」(＝1b)、「上位語」(＝1c)、「一般的包括語」(＝1d)、「代名詞」(＝1e)を用いることにより、先行文脈との意味的首尾一貫性が保たれている[3]。このような語彙的結束構造には言語的文脈が深く関わっているので、テキストの情報構造を解明する上で一つの手掛かりとなるのである。

1．2

すでに見たように、語彙的結束構造にはいくつかのタイプがある。しかし、これらがす

べて平均的に用いられているかというと、そうではなさそうである。たとえば、英語では(1 a)のような「反復」は避けられる傾向がある。次例のように、動詞句までも繰り返すと、「子供向けの教科書」のような稚拙な印象を与えるという[4]。

(2) A man came to the office. The man who came to the office tried to sell me an encyclopedia. (Donnellan 1978:58)

そこで、勢いほかの語彙による「言い換え」が多用されることになる。最も単純なやり方としては「代名詞」の使用ということになるだろうが、実際には「同義語」「上位語」「一般的包括語」による言い換えも広く用いられている。

(3) a. Yamagiwa's clash with police was the most violent in what has become a ritual *conflict* between the Chinese government and foreign journalists covering the anniversary of the June 4 crackdown. (Newsweek June 15, 1992)

b. "It is a very good height indeed!" said the Caterpillar angrily.... And she thought to herself, "I wish *the creature* wouldn't be so easily offended!" (L. Carroll: *Alice in Wonderland*)

c. There were two built-in cupboards, but one of them ... was locked and the key lost. Indeed *the whole thing* had been painted over. (A. Christie: *Sleeping Murder*)

これに、次例のようなヒト／モノの正体や属性を明らかにする「同定語 (identifying terms)」によるパラフレーズを加えると、英語のテキストには相当数の「言い換え」が分布していることになる。

(4) Foreign Minister Klaus Kinkel, who as justice minister later year tried to extradite Honecker, called *the former East German leader* a tragic figure. [Honecker is the former East German leader] (*Newsweek* August 10, 1992)

1．3

これに対して、日本語のテキストでは語彙的結束構造がどのように実現されているのであろうか。次の資料は、いくつか短いテキストを分析した結果である。英語の場合と同様に、大量のデータを統計的に処理したわけではないが、日本語における一般的傾向を知るには十分であろう。

資料1　芥川龍之介　「トロッコ」

トロッコの出現		総数５６	
内訳	「トロッコ」	(繰り返し)	３７例（６６％）
	「車」	(上位語)	５例（　９％）
	「一」	(省略)	１４例（２５％）
	「それ」	(代名詞)	０例（　０％）

良平の出現		総数	
内訳	「良平」	(繰り返し)	４４例（５５％）
	「少年」	(上位語)	０例（　０％）
	「一」	(省略)	１７例（２１％）
	「彼」	(代名詞)	１９例（２４％）

資料2　川端康成　「山の音」

信吾の出現		総数１１９	
内訳	「信吾」	(繰り返し)	９０例（７６％）
	「一」	(省略)	２９例（２４％）
	「彼」	(代名詞)	０例（　０％）

資料3「ペロー神話はどこまで真実か」
(ニューズウィーク日本版 1992/6/18)

内訳	「ペロー（等）」	(繰り返し)	６５例　（７３％）
	「一」	(省略)	２０例　（２３％）
	「彼」	(代名詞)	２例　（　２％）
	「セールスマン」	(言い換え)	２例　（　２％）

まず日本語の場合、要素の省略が比較的多いことが英語と大きく異なる点といえる。しかし、そのようないわば統語上の制約に起因する差異は別としても、両言語の語彙的結束構造には著しい違いが見られる。すなわち、日本語の場合、（１）同一名詞（句）の繰り返しがきわめて多く、（２）上位語の使用に代表されるような言い換え表現が非常に少な

い、ということである[5]。これは、繰り返しをなるべく避け、その半面言い換え表現を好む英語とは正反対の傾向である。特に日本語では、ヒトでもモノでも名前が明らかな場合、何度もその名辞を用いて指し示す傾向が強い。確かに、同じ名詞（句）を繰り返し使用したとき、多少くどくどしいという感じを相手に与えるかも知れないが、すくなくとも稚拙な文章という非難は当たらない。

以上の考察から、英語のテキストを忠実に日本語に置き換えてしまうと、すくなくとも語彙的結束構造に関しては不自然なテキストがえられてしまうことが予想される。次節では、英語の文章とその日本語の翻訳テキストを比較することによって、この点について詳しく検討してみることにする。

1．4

まず次の日本語を考えてみよう。

(5) レビの右側の男が小柄なダイアモンド研磨師の身体を両腕で抱きしめ、手袋をはめた片手で彼の口をふさいだ。（「第四の核」篠原　慎訳）

(6) 大男の用務員がドアを両側に押し開いて、州警察官に声をかけた。「下の方をもってくれないか？両側で支えてくれ。地面に下ろすんだ。そっと。」バーニーがレクター博士を押してランプを上がり、機内に入った。（「羊たちの沈黙」菊池　光訳）

いずれも英語のテキストを忠実に日本語に置き換えたものである。しかし、「小柄なダイアモンド研磨師＝レビ」であり、「大男の用務員＝バーニー」であることが、一読して理解できる人がどれだけいるだろうか。英語ではいわば「同定語」による言い換えが自然に行なわれるわけであるが、たとえ先行文脈でそれぞれの人物の素性が明らかになっているとしても、同じことを日本語でやるときわめて曖昧なテキストができあがってしまう。上の翻訳はまさにその典型的な例といえる。

これに対して、次は日本語として自然な例である。

(7) a. She brought her mind back with an effort to her discussion with Taylor. (.....) *The man* came up with her and examined the door. (A. Christie: *Sleeping Murder*)

b. 彼女はテイラーとの話し合いにつとめて注意をひきもどそうとした。（中略）テイラーは彼女といっしょに二階に行き、戸棚のドアを調べた。（綾川　梓訳）

(8) a. The Mouse gave a sudden leap out of the water, and seemed to quiver all over with fright. "Oh, I beg your pardon!" cried Alice hastily, afraid that she had hurt *the poor animal*'s feelings. (L. Carroll: *Alice in Wonderland*)

b. すると鼠はいきなり水の中からとび上がり、こわさに全身をぶるぶるふるわせた。（中略）鼠の気を悪くしてはいけない、と思ったのです。（福島正実訳）

(9) a. Barney rolled Dr. Lector up the ramp and into the airplane. Three seats had been removed on the *craft*'s right side. (T. Harris: *The Silence of the Lambs*)

b. バーニーがレクター博士を押してランプを上がり、機内に入った。機内の右側の座席が三つ取り外してあった。（菊池　光訳）

いずれも元の英文では言い換え表現が採られている箇所であるが、訳者は翻訳にあたって（おそらく直感的に）同じ語の反復を行なっている。その結果、(5)(6)の例文に見られたような曖昧性は生じていないのである。

あるいは、次の例のように、原文を活かしながら日本語の癖にも気を配った、いわば折衷訳も見られる。

(10) a. M. Bouc was a Belgian, a director of the Compagnie Internationale de Wagon Lits, and his acquaintance with *the former star of the Belgian Police Force* (=Poirot) dated back many years. (A. Christie: *Murder on the Orient Express*)

b. ベルギー警察のかつてのスターであるポワロとは、ずいぶん以前からの知り合いであった。（長沢弘毅訳）

いずれにしても、われわれは言い換え表現中心の英文を（自然な）日本語に置き換える作業の中で、半ば無意識的に繰り返し表現を採用しているわけで、先に提示した資料１～３のデータもけっして偶発的なものとはいえない。日本語テキストのひとつの特性と考えても差しつかえないだろう。したがって、文文法のレベルではすでに自明なように、英語を忠実に日本語に置き換える作業は、テキスト構成のレベルでも不十分なことがわかる。

語彙的結束構造に関する以上の議論からは、英語と日本語のテキストはそれぞれ根本的に異なった性格をもつことが明らかになった。次節では、これに対応して両言語における情報分布のありかたと、その背景にある原理の違いを探ってみることにする。

2　情報の流れと語彙的結束構造

2．1

英語の文章における語彙的結束構造に、言い換え表現が多く用いられることはすでに見たとおりであるが、その場合要素間の距離が比較的長い点にも注目する必要がある。次の例ではjeweller = Walterであるが、この人物が宝石商を営んでいるという記述は文境界の数にして実に百以上前の文脈にある。

(11) "I suppose it would be hard to put a true value on it," said Walter.
"It certainly would," said Gerald firmly.
"I didn't mean a monetary value," said *the jeweller* with a smirk. (J. Archer: *A Twist in the Tale*)

これが多少極端な例であるとしても、テキストとして意味的首尾一貫性が保たれていることに異論はないだろう[6]。それにしても、なぜこのように距離を隔てた言い換え表現が可能なのであろうか。

語彙的結束構造の問題に限らず、英語では前後の文が比較的密接に結びついていると思われるふしがある。たとえば、次の文は途中に文境界が挿入されているが、電話による一連のやりとりを描写したくだりである。

(12) ... he (Dr. Akin) had a brief telephone conference with the pathologist in Claxton. Then he agreed to everything.（エイキン博士は電話の向こうクラクストンにいる病理学者と二三意見をかわし、その後は相手のことばにウンウンとうなずいていた。）(T. Harris: *The Silence of the Lambs*)

一方、原文の文境界を尊重してこれを日本語にすると次のようになってしまう。

(13) ドクタ・エイキンがクラクストンの病理学者と簡単に電話で話をした。その後は、すべてに同意した。（菊池　光訳）

これでは、あたかも前半で電話をかける動作が終了したかのような印象を与えてしまう。つまり、日本語ではある部分を文として独立させると意味的にも独立する（度合いが高い）のに対して、英語では必ずしもそうならないのである。むしろ、後ろの文は前の文を前提として新たな意味を展開しているといった方がよかろう[7]。つまり、テキストを一つひと

つの文の集合体と考えるならば、日本語は《孤立型》、英語は《累積型》と呼べるような特性をもっているといえる。例文(11)のように距離を隔てた言い換えが可能なことは、英語のテキストが《累積型》で、それゆえに個々の文のいわば粘着度が高く、常に先行文脈の上に構築されていくことと無関係ではないように思われる[8]。次節では、テキストのこのような特性が情報の流れにどのような影響を与えるのか、グライスの公理も援用しながら考察し、本稿のまとめとしたい。

2．2

Hatim and Mason (1990:97)は、英語とフランス語を比較して、M. Tricot = a councilor of stateである証拠を欠く文脈では、次例のようにフランス語は言い換え表現を許すが、英語では不自然なため、代名詞の使用が好ましいと指摘している。

(14) a. *Le Conseiller d'Etat* (=M. Tricot) s'est ainsi longuement interroge sur la signification de la phrase ....

b. *He* was persistently questioned about the meaning of the phrase ....

グライスが唱える「（先行文脈と）関係のあることを言え」という《関連性(relation)の公理》に抵触する、というのがその理由である[9]。しかし、今回の議論からも明らかなように、すくなくとも日本語に比べると英語は言い換え表現を好む傾向が強く、英語とフランス語の差も結局は程度の違いということになりそうである。

これを情報の種類と量の観点から考えてみると、英語やフランス語が好む言い換え表現とは、指示物の属性やアイデンティティを別の切り口から提示するやり方で、本質的にテキストの情報量を増やす働きがある。グライス流にいうと、「過不足なく情報を与えよ」という《量(quantity)の公理》に従っている。一方、日本語が好む繰り返し表現とは、《孤立型》の文から必然的に要求される。つまり、センテンスが改まるたびに、新しい情報提示の前（あるいはそれと同時）に先行文脈との関連性を確認・確立しなければならず、そのために同じ表現が繰り返されるのである。これは、グライスの「関連性の公理」に従っているのであり、情報量を増やすという意味からはむしろ妨げになると考えられる。

グライスが唱えている公理のうち、すくなくとも今取り上げた「量の公理」と「関連性の公理」とは元来お互いに対立する概念である。すなわち、前者は新しい情報を、後者は旧い情報を、それぞれ念頭においた約束事であり、一方を優先すると必ず他方が犠牲になる[10]。両者を秤にかけたとき、英語のテキストは「量」に重きを置いた展開、日本語のテキストは「関連性」に重きを置いた展開となり、この違いはそれぞれの言語テキストが有する特性（《孤立型》vs.《累積型》）に起因している、というのが今回の議論の主旨である。時間軸に沿って情報量が飛躍的に増えるのが、《量》指向型の英語テキストだとすれば、情報の流れが繰り返し止められ、時間軸に沿って緩やかに全体の情報量が増えていくのが《関連性》指向型の日本語テキストだ、という見解も成り立つであろう。新情報・旧情報の根本的な捉え方にも関連するこのあたりの詳しい議論は、別に稿を改めることとしたい[11]。

【注】

1. 《テキスト》とは、英語もしくは日本語で書かれた文（通常２つ以上の文）から成る集合体、といった程度の意味である。話し言葉や一個だけの文は、今回の議論の性格上対象外であることを了承してもらいたい。なお、テキストの概念については、de Beaugrande and Dressler (1972:1-13)やBrown and Yule

(1983:190-204)を参照のこと。

2. 意味的首尾一貫性と結束構造の区別については、Lyons (1981)を参照のこと。

3. ただし、語彙的結束構造が実現されておれば必ず意味的に首尾一貫しているというわけではない点に注意すべきである。

4. de Beaugrande and Dressler (1972:54)では、話し言葉はともかくとして、推敲が可能な書き言葉における繰り返しは、「情報性を下げる」という理由で不自然としている。

5. 代名詞の使用頻度に関しては、時代や作家による違いを考慮に入れる必要があろう。特に、英語の影響を受けた作家では代名詞を多用することに抵抗が少ないことが予想される。ただし、その場合でも、英語と同じように純粋に文法的な指示機能を担っているだけなのか疑ってみる必要がある。ここでは、「《彼》や《彼女》は...かなり三人称的だが、heやsheほど三人称代名詞ではない。（《彼》や《彼女》は）代名詞的でもあるが、また、名詞的でもある。」という柳父（1982：212）の言葉に注目したい。もしそうならば、日本語の語彙的結束構造はかなりの部分が同一語句あるいは準同一語句の繰り返しから成るという見方も可能である。

6. 日本語でも書き手の文体によっては言い換え表現が用いられることを否定するわけではないが、その場合避けがたい曖昧さが残ることにここでは注目したい。

7. たとえば、(a) John fell down (b) He broke his crownといったとき、二つの文の間の意味的空白埋める推論作業(bridging)が行なわれ、(a)が(b)の原因/理由であるという解釈が得られるといわれるが、その背景には意味的関連性を前提とした英語の発想があるように思われる。日本語では一つの文にまとめるか、何かつなぎ言葉が欲しいところである。

. 8. 英語の冠詞、特に定冠詞の存在は、このような特性を統語面からバックアップする手段という見方も可能であろう。

9. 協調の原則(Cooperative Principle)にもとづく会話の公理(Maxims of Conversation)の詳細については、Grice (1975)を参照のこと。また、Griceが示す4つ公理をRelevance（関連性）の概念一つにまとめようとする試みとしてSperber and Wilson (1986)がある。

10. 情報の新旧に関する詳しい議論は、Prince (1981)を参照のこと。

11. 語彙的結束構造をめぐる情報の新旧に関する立ち入った議論は、拙論「情報の新旧について：語彙的結束構造との関連から」（準備中）を参照してもらいたい。

【参考文献】

Brown, G. and G. Yule (1983) *Discourse Analysis*, Cambridge University Press.

de Beaugrande, R. and W. Dressler (1972) *Introduction to Text Linguistics*, London: Longman.

Donnellan, K.S. (1978) Speaker reference, descriptions and anaphora, in P. Cole (ed.) *Syntax and Semantics* vol. 9, 47-68.

Grice, H. P. (1975) Logic and conversation, in P. Cole and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics* vol. 3, 41-58.

Halliday, M.A.K. and Hasan R. (1976) *Cohesion in English*, London: Longman.

Hatim, B. and I. Mason (1990) *Discourse and the Translator*, London: Longman.

Lyons, J. (1981) *Language, Meaning and Context*, London: Fontana Books.

Prince , E. F. (1981) Toward a taxonomy of given-new information, in P. Cole (ed.) *Radical Pragmatics*, 223-255.

Sperber, D. and D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Basil Blackwell.

柳父　章（1982）『翻訳語成立事情』、東京：岩波書店。

山本英一（準備中）情報の新旧について：語彙的結束構造との関連から。